

ウィリアム・フォークナーの作品における過去
——身体的記憶とその表象——

文学部文学科英米文学専攻

こぬま りくと
小沼 陸斗

序文

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) にとって過去とは、単に過ぎ去るものではなく、現在はおろか未来さえも支配するほどの影響力を持っているものである。彼は、佐藤道夫が述べるように「過去にさかのぼることを旨とした作家であった」(244)。この「過去」について、例えば、フレデリック・J・ホフマンは次のように説明する。

純粹な、あるいは単独としての時間としての現在は、全くと言っていいほど見られない。現在は過去と融合しており、過去との関連において意味をなす。そして現在の複合性の原因もこの二つの融合にあるのだ。フォークナー的時間は連続体と説明されてよいのであり、時間は過去から現在へ、そして現在から過去へと流れる。(21-22)

フォークナー的時間(過去)について考える時に重要になるのは、彼が南部人、とりわけ、南北戦争の敗北を経験した南部人の第三-四世代であるということである。アメリカ最大の内戦である南北戦争(1861~1865)とそれに伴う北部による支配(北部化)が南部社会に与えた影響は経済的なものだけにとどまらず、むしろ精神的、内面的なものに注目すべきであろう。井出義光が述べるように、「精神的に南部は敗戦によってより南部らしくなる」(45)のである。

この南部らしさ、つまり南部性について、田中久男は次のように簡潔にまとめている。

南部の精神を精神的、内面的要素から南部的な要素を抽出すると、白人種優越感、貴族性の存在、好戦的精神や暴力性、農本主義の四つに分けられる。また、白人優越感は、宗教上、根本主義という進化論を排する偏狭な世界観が絡まり、KKKのような白人至上主義の秘密結社の温床になりやすく、貴族性は騎士道精神や温情主義を尊ぶ傾向に結びつき、時代錯誤的な伝説を生む土台となる。そして、好戦的精神や暴力性は、勇敢な敗北や、向こう見ずの行為に走る熱い血と一体の関係にある。(14)

ここで挙げられているようなことは、これから取り上げる作品において、『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*)のクエンティン・コンプソンには騎士道精神を、『八月の光』(*Light in August*)では作品全体に広がる白人種優越感を、また『土にまみれた旗』(*Flags in the Dust*)や「バーベナの匂い」("An Odor of Verbena")では、サートリスの血に見られる好戦的精神や暴力性をそれぞれ確認することができる。また、クエンティンのピューリタンの精神やジョー・クリスマス(父)の養父をはじめとするカルヴィン主義を通して、上記で述べられているような宗教観を見ることができる。

南部社会におけるこういった精神は、時代の流れとは相容れないものである。しかし、だからこそ、敗戦という現実から目を逸らすためには、古き良き過去を、時には歪んだ形であったとしても、振り返るだけでなく、作り上げ、共有し、そして保存する必要があったのかもしれない。南部という土地を舞台にし続けたフォークナーは、時代の転換期に南部の名家に生まれ、南部社会の過去や伝統を背負いながらも、時代の流れや進歩をその社会が受

け入れていく必要性もまた感じていただろう。第一章からは、フォークナー的時間および過去について、身体的記憶とその表象に焦点をあてながら論じていく。彼の作品において過去（記憶）がどのような意味を持っているのか、また南部人の彼が、南部的過去にどう向き合ったのかということをも明らかにしていく。

第一章 『響きと怒り』 (*The Sound and the Fury*) における過去

——クエンティン・コンプソンを中心に——

1960年6月2日、クエンティンの一日は、まず大学寮で目覚める所から始まり、自殺場所を定め郊外に行き、夕方一度大学に戻り、そこで身支度を整え、寮を出る所で終わる。彼はこの一日で、改めて「時間を征服すること」はできないと悟り自殺をするが、ここでは主に彼の「現在」における「過去」と、彼の「時間」との格闘を通して、先に挙げた「フォークナー的時間認識」を確認する。なお、ここで言う彼の「過去」とは主に二つに分けることができる。まず、ホフマンが言うところの「固定的世界」(57)、つまり彼らがまだ子供であった頃を指し、彼は弟ベンジー同様に、これを理想とした。そしてもう一つが、この「固定的世界」を破壊する決定的な出来事である、妹キャディの処女喪失という過去である。

フォークナーは後に、「彼が愛したのは妹の肉体ではなく、コンプソン家の名誉という観念であった」(749)¹と、クエンティンにとってキャディの処女性を持つ意味を語っている。フォークナーが述べる「コンプソン家の名誉」については後述するが、まずはキャディの処女喪失について詳しく見ていきたい。

次に挙げるのは、キャディの処女喪失後、1909年の川辺のやりとり、逢引の同伴の場面である。

Especially the honeysuckle it had get into my breathing it was on her face and throat like paint her blood pounded against my hand I was leaning on my other arm it began to jerk and jump and I had to pant to get air at all out of that thick gray honeysuckle (100)²

とくにスイカズラが 僕の息にも入り込むし 彼女の顔や喉にも絵の具を塗ったように ただよって 彼女の血が僕の手をドクドクと打ち 僕はもう片方の腕に寄りかかっていたけど その腕が引きつってピクピク動きはじめ その濃密な灰色のスイカズラから 僕はすこしでも息を吸いこもうとあえがなければならなくて (292)³

この一節では、性の象徴であるスイカズラが霧のように空気中に立ち込め、クエンティンやキャディにまわりつくイメージによって、キャディの処女喪失という事実が否応なく突き付けられる様子が描かれている。また、同時に、何とかしてその事実を否定したいというクエンティンの願いが次の箇所、特に匂いをかがないために顔を地面に伏せるという行動から読み取れる。

Damn that honeysuckle I wish it would stop (101)

スイカズラのやつ 匂いが止まってくればいいのに (296)

the honeysuckle getting stronger and stronger and the smell of water then I could see the water the color of gray honeysuckle I lay down on the bank with my face close to the ground so I couldnt smell the honeysuckle I couldnt smell it then (103)

スイカズラの匂いがどんどん強くなり それから水の匂いがして 川の水が見え 灰色のスイカズラのような色で 土手に寝ころび スイカズラをかがないですむように 顔を地面に近づけると うまくいってかがなくてすんだので (301)

上記に挙げた場面で頻出しているスイカズラの匂いについては後で詳しく考察していくため、ここでは、クエンティンは、スイカズラの匂いに象徴される「性」をキャディの処女喪失によって突き付けられることと、またそれを否定したいという願望を強く持っていることに注目したい。なぜ彼がこれを否定したいのかについて考える時、先に挙げたフォークナーの言葉と「固定的世界」について詳しく見る必要がある。

そこでまず、「コンプソン家の名誉」とは何かという問いを挙げたい。これは、もちろん、時代の流れによって旧南部的価値観が失われていく中で、長男として、没落していく「コンプソン家の名誉」を守りたいという字義通りの意味があるだろう。フォークナー自身の伝記的な事実を踏まえても、このように捉えることは自然であるが、実際のところ、「コンプソン家の名誉」という観念にはそれ以上のものがあると思われる。

クエンティンはコンプソン家の長男として幼少の頃から勉強に勤しんでおり、結果として、母親にとって鼻が高い大学に、ベンジーの草地を売ることなどでなんとか通うことができた。弟の愛したものの犠牲、親の期待、そして長男であることなどを考えれば、これが家に対する彼の強い名誉意識につながったと言えるだろう。しかしながら、長谷川芳男は、クエンティンのこういった名誉意識の形成を認めながらも、「彼が名誉の中に見ていたものは、失われゆく旧南部の伝統であり、それも伝統のよき面であること、また、彼が、過去にこだわったのは、現在には名誉が考えられる世界が存在しないからであり、現在の頹廢と混乱に比して、かつて（大人たちが農園主として農奴を支配しながらも、土に密着して生きる素朴さを失っていなかった時）は美徳という名で呼び、誇りとする事ができる人間行為を含みうる世界が存在したからである」と指摘する (123-25)。

確かにクエンティンは、ドールトン・エイムズに決闘のようなものを仕掛けるもあっさりと敗れ、女の子のように気絶する (313)。この一件を通して、クエンティンは、ブルックスが述べるように、「自分が古い英雄の規範、名誉ある男の規範であると考えているものに従うことができないことを証明され、彼は妹を楽しむことを目的としたハンサムな一時的な存在から妹を守ることができない」(56) ということを感じかされる。ピューリタンの純潔の価値観を持っているクエンティンは、妹の純潔を汚した男を本気で町から追い出そうと、エイムズに脅しのような忠告を与えたが全く真剣に受け止められず、「この件をそんなに真剣に受け取ったてしかたがねえんだぜ 坊や あんたが悪いわけじゃない 俺でなけりゃ 誰かほかのやつがやっちゃったことさ」(310) と彼が大事にする純潔は軽んじられた上、挑発的に拳銃を渡され、最終的には殴られるという始末である。現在では、クエンティンが大切にしている「美徳」は価値を持っておらず、彼にとってはまさに、旧南部の良き面の喪失と

感じられただろう。

クエンティンの旧南部を愛する気持ちは例えば、飛ぶように谷を通り抜ける汽車の中で、彼が子供時代にはまだ舗装されていなかったぬかるんだ道、うらぶれた駅やおもちゃなどのふるさを思い出し、胸がよじれるという場面から見て取れる（172）。また、『響きと怒り』（クエンティンの章）においては、現在の南部の様子を直接的に描写している箇所はあまり見られないが、例えば、同じく彼が語り手として登場する「あの夕陽」（“That Evening Sun”）からそれを知れる。

The streets are paved now, and the telephone and electric companies are cutting down more and more of the shade trees—the water oaks, the maples and locusts and elms—to make room for iron poles bearing clusters of bloated and ghostly and bloodless grapes, [...] (289)⁴

いまでは街路はすっかり舗装され、電力会社や電話会社は、ふくらんだ、無気味な、生気の通っていないブドウの房のついた鉄柱を立てる余地を作るために、街路樹—ミズガシワとか、カエデとか、ニセアカシアとか、ニレとかいった樹木をだんだんに切り倒してゆくのである。（104）⁵

ここでは、クエンティンが全て名前を知っている子供の頃から身の回りにあったであろう木々が、不気味で生気の通っていない鉄柱に置き換わるという変化を彼が快く思っていない様子が伺える。彼が大人になった頃のジェファソンでは、正に次々と工業化、産業化の波が押し寄せていた頃であり、目まぐるしい変化の中で、エイムズの例でみたように、「かつては美德と呼べた人間的行為」はもはや通用せず、また、彼の好きだった景色も次第に失われていく。これは、正に長谷川の言う所の「現在の頹廢と混乱」であり、次第に失われていくものに対する抵抗、反発の気持ちこそが、クエンティンの持つ「名誉」意識であると言えるのではないか。

クエンティンの持つ名誉意識をこのように捉えた場合、なぜ彼が、変化をこうむることがない「固定的世界」を理想とするかが分かるだろう。南部人の彼にとって、キャディの処女喪失に象徴される時代の変化は、南部の頹廢を意味するために否定しなければならないものなのである。

そして、我々は、彼が主に郊外を歩き回る「現在」において、時間と格闘する様子、そしてそれに敗れる姿を目撃する。この時間との格闘について仁木勝治は次のように分析している。

クエンティンの時間との戦いは懐中時計を打ち砕くという具体的な行為によって表される。彼は純潔を、ピューリタン精神に培われたコンプソン家における名誉の象徴であると考えた。キャディの処女喪失によってコンプソン家の名誉を汚されたと考えるクエンティンが、その喪失を回復させる手段として物理的時間を打ち消そうとするのもそのためである。（54）

クエンティンは、現在の時間を打ち消そうとしているが、大学の鐘は十五分おきに鳴り、

例えば、「食べているあいだにどこかの時計が正午を打つのが聞こえた」(163)とあるように、クエンティンは否応なく現在の時間を知らされる。彼にとって時間は、「なにかあることをしたくないと思っていても、からだがいわば無意識に、心を騙してさせようとするもの」(164)、つまり、どうやっても意識せずにはいられないものなのである。

彼が郊外に行くという行為は、自殺場所を決めるという目的だけでなく、現在の時間を告げる鐘や時計の音から逃げる行為とも取れるが、そこにもサイレンで時間を告げる工場や時計がある教会といった危険が存在する。また、彼は、時間から逃げることで一時的にそれを意識しないということが無意味であることは十分知っている(152)。

クエンティンの思考の流れに最も顕著に表れているように、彼の「現在」は常に「過去」、とりわけキャディに関連する出来事によって埋めつくされている。そしてまた、彼の未来は「実際には非未来であり、単純な死の約束である」(131)とブレイクスタンが指摘するように、キャディの処女喪失という決定的な出来事が起こった時すでに決定してしまったのである。この、過去が現在を支配するだけでなく、「非未来」という形で、未来さえも支配してしまうという性質は、後に取り上げる『八月の光』のジョー・クリスマスや『土にまみれた旗』のヤングベイヤーにも共通していることである。

ここまで見てきて、クエンティンが変化を否定したいのは、彼の中に、失われゆく旧南部的価値観を保存したいという願望があるためという事が分かった。では、彼がこういった価値観を持つに至った原因、そしてまたこれを愛する理由とは一体何なのか。この問いにこそ、我々は「南部性」もしくは、南部社会で生きるということが持つ意味を見出すことができる。

結論を先に述べてしまえば至って明確であり、それはクエンティンが南部に生まれたからである。しかしこの事は明確であると同時に理解することは難しい。

フォークナーは『響きと怒り』で自殺をしたクエンティンを『アブサロム・アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*)で語り手として甦らせた。そして彼は、北部の大学で友人のシュリーブにサトペン物語を聞かせるが、次に挙げる場面からは、如何にしてクエンティンがその物語(南部の物語)を知ることになったかという事が分かる。

Quentin had grown up with that; the mere names were interchangeable and almost myriad. His childhood was full of them; his very body was Quentin had grown up with that; the mere names were interchangeable and almost myriad. His childhood was full of them; his very body was an empty hall echoing with sonorous defeated names; he was not a being, an entity, he was a commonwealth. He was a barracks filled with stubborn back-looking ghosts still recovering, even forty-three years afterward, from the fever which had cured the disease, waking from the fever without even knowing that it had been the fever itself which they had fought against and not the sickness, looking with stubborn recalcitrance backward beyond the fever and into the disease with actual regret, weak from the fever yet free of the disease and not even aware that the freedom was that of impotence. (12)⁶

クエンティンはそのような物語と共に成長してきたのだが、登場する名前はいつも取り

換えられたし、しかもその数は限りなくあった。彼の子供時代はそのような名前に満ち満ちており、彼の身体そのものが、敗北者たちの名前が朗々と響き渡る、がらんとしたホールであり、彼は一つの存在ではなく、一つの実体でもなく、一つの共和国だった。彼は頑なに過去を振り返る亡霊たちがひしめき合う兵舎であり、その亡霊たちは戦後四十三年たった今でもなお、あの病氣〔奴隷制度の下に成り立っていた旧南部〕を直してくれた熱〔南北戦争〕から回復しきれず、自分たちが戦ったのは病氣とではなく、熱そのものであったことを理解しないまま、熱からいまだ冷め切らず、熱のために衰弱しているものの、病から自由になったのに、それが何もできない、不能という名の自由であることに気づくこともせず、いまだに悔恨に浸りながら頑迷な意固地さで、熱の向こうの病を振り返って見つめているのだ。(26-27)⁷

この一節では、クエンティンは個人としての存在ではなく、共和国であると語られている。つまり、彼は南部の歴史（記憶）および奴隷制度の下に成り立っていた古き良き南部への執着心という、特に南北戦争後に形成された南部の精神——これは彼が生まれる前から南部という共同体によって作られ、広められ、保存されてきたものであるが——を、その物語と共に成長することで、否応なく知らされると共に、それを保存するという役割を担うことになるのである。まさにそれが南部に生きるということなのであり、クエンティンはこの物語（サトペン物語）をミスコールドフィールドから聞く前から知っていた。なぜ知っていたかという点、「彼が、1833年のあの日曜日の朝、あの教会の鐘が鳴り響いた時と同じ空気で生まれ、いまだにそれを呼吸していたから」（63）である。しかし、この「空気」の本質はやはりその空気を呼吸したことのない者には到底理解することができない。それはクエンティンの友人で北部生まれのシュリーブがどう理解しようとしても、南部というものを理解することができないということによく表れている。

“ [...] We dont live among defeated grandfathers and freed slaves (or have I got it backward and was it your folks that are free and the niggers that lost?) and bullets in the dining room table and such, to be always reminding us to never forget. What is it? something you live and breathe in like air? a kind of vacuum filled with wraithlike and indomitable anger and pride and glory at and in happenings that occurred and ceased fifty years ago?” (361)

「僕たちは戦に負けた祖父たちや解放された奴隷たち（それとも僕の勘違いで、解放されたのが君たちで、負けたのが黒人だったっけ？）、それにダイニング・ルームのテーブルなんかに残された弾痕といったような、決して忘れるな、と絶えず思い出させておこうとするものに囲まれて暮らしてはいないのさ。それは一体何なんだい？君たちがその中で生きたり呼吸したりしている空気のようなものは何なの？五十年も前に起こって終わってしまった出来事〔南北戦争〕に対する、死霊のような、抑えようもない怒りと誇りと栄光に満ちている真空のようなものは何なの？」(351-52)⁸

シュリーブの問いは、クエンティンに対するものというよりも、南部社会そのものに対する

る問いであり、彼はここで、南北戦争について、なぜいまだに南部人はそれほど強い執着心を持っているのかと問うている。これに対して南部人クエンティンは、「君にはとても理解できないさ。南部で生まれなきゃ分からないことだから」(354)と答える。繰り返しになるが、これが南部に生きるということであり、南部で生きるということは、そこで作り上げられてきた歴史(記憶)を否応なく背負うことを意味する。『響きと怒り』においてクエンティンは、没落していく南部貴族の長男として(このことはフォークナー自身にも重ねられる)、南部人らしい執着心を持って、変化していく時間にあらがおうとしたが、それができないことを再確認し、唯一の平穏である死へと向かったのである。

シュリーブが問う、南部人の南北戦争への執着心は、例えば、機械的な時間からは完全に切り離されて、過去の中に生きている『八月の光』のゲイル・ハイタワー牧師を見ればより明らかであり、彼の場合、自殺をしたクエンティンとは異なり、現在においても過去の中に生き続けている。

第二章 『八月の光』(*Light in August*) における過去

第一節 過去に生きた男ゲイル・ハイタワー

ゲイル・ハイタワー牧師は『響きと怒り』のベンジーと同様に「現在」という時間の中にはいない。彼はかつてジェファソンで牧師であったが、妻に死なれ、牧師の職を追われた後は町の中心から離れた場所でひっそりと暮らしている。そんな彼の日課と言え、夕暮れの直前に書斎の窓辺の決まった場所に座り、日暮れを、夜と疾走する蹄が訪れる瞬間を待つことである。彼がその瞬間を待つのは、それが「名誉と誇りが、人生がまだ残っている」(88)⁹と思わせてくれるからである。彼にこういった感覚を抱かせてくれるものは、もはや「現在」にはなく、それは「過去」、とりわけ南北戦争に従事した彼の祖父にまつわる過去の中にのみ存在している。下記に挙げる例からは、ハイタワーにとっていかにその過去が重みを持っているのかということが分かる。

With his religion and his grandfather being shot from the galloping horse all mixed up, as though the seed which his grandfather ad transmitted to him had been o the horse too that night and had been killed too and time had stopped there and then for the seed and nothig had happened in time since, not even him. (445)¹⁰

彼の宗教と、疾走する馬から撃ち落された祖父とはすっかり混ぜ合わさってしまっていたのであり、それはまるで、祖父が彼へと送った生命の種もあの夜に馬上にあってやはり殺され、その種にとっての時間はその時その場所で停止し、それ以降起こったことは何一つなく、彼自身さえも生まれなかったかのようなのだ。 (94)

ハイタワーのなかで、祖父にまつわる過去はもはや彼の宗教となっており、彼にとっての現在とはこの過去である。彼は、幼少の頃からこの祖父や南北戦争にまつわる記憶に触れて生きてきた。例えば、彼は八歳の頃にその記憶(南軍の制服)が入ったトランクを開ける。

そしてトランクの中の制服を見ながら、彼は「勝利感の入り混じった恐怖感を密かに感じ、軽い吐き気を覚えた」(326)¹¹。そしてまたある日、同じようにトランクを開け、自分の父親は北軍兵士を殺したのだろうかと考え再び恐怖し、田中が述べるように、「現実を回避するために祖父の伝説に縋り始める」(206)のである。そして彼が祖父についての話を黒人女に聞くとき、彼が感じるのは、勝利感でも恐怖感でもなく「誇り」である(327)。ハイタワーは、実際に存在している父親の戦争に関するエピソードは、知りたいと願うと同時に、知ることを恐れた。それに対して、すでに死んでいる祖父の話しを聞くことに対する恐怖感は一切ない。それは、その話に出てくる人々が、ただの亡霊にすぎないため、「現実」を感じさせないからである。

No horror here because they were just ghosts, never seen in the flesh, heroic, simple, warm; while the father which he knew and feared was a phantom which would never die. (752)

彼ら〔祖父の話に出てくる、彼が殺した人々〕はただの亡霊にすぎず、その勇ましくも単純で暖かい生身の肉体を見ていなかったのも、ここに恐怖などなかったのだ。一方、彼が直接知り恐れていた父は、決して死なない幻影だった。(338)

そしてハイタワーはかつて祖父がいたジェファソンにその亡霊を求めてやってきた。彼はジェファソンへ向かう電車の中で、自分らがいつか住むことになる場所について次のような期待を抱いている。

But soon, as soon as we can, where we can look out the window and see the street, maybe even the hoofmarks or their shapes in the air, because the same air will be there even if the dust, the mud is gone (756)

でもすぐに、できるだけすぐに、窓からその通りが見える場所に住むんだ。もしかしたら蹄の跡や彼らの姿さえ空中に見えるかもしれないね。だって、たとえ埃が、泥がなくなっても、同じ空気がそこにあるんだから(347)

ハイタワーは、かつて南軍兵士が通った通りに住むことを望んでいる。そしてまた、彼が言うこの同じ「空気」は、前章において北部人のシュリーブが理解することができなかったあの南部の空気である。ハイタワーはクエンティンよりも一層露骨に南北戦争というものを神話化し、それにいまだに強い執着心を持っている。彼は、祖父の亡霊を、かつて南北戦争が行われた時と同じ空気を求めて、この地にやってきた。そして年老いた今も、「もはや現実の生を生きていない人間の臭い」(100)を発し、過去に囚われて生きている。彼のこの過去への執着心は、クエンティンの変化を否定したいという願望と同様に、南部人のそれである。このことについて、ジョアン・S・コレンマンは次のように述べている。

フォークナーは、クエンティン・コンプソン、ゲイル・ハイタワー、アイク・マックスリンのような、時間の流れを少なくとも部分的に止めて、理想的な過去に戻り、それ

を保存することを望む登場人物たちに対して、最も真剣かつ情熱を持って接しているように見える。彼らのものは多くの意味で南部の願望であり、彼らに対するフォークナーの複雑な感情は、南部の伝統に対する彼の反応の複雑さを反映している。(130)

コレンマンが指摘するように、フォークナーは、南部社会で作り上げられ、共有されている歪んだ歴史や神話に対して、旧南部のやり方で育ち、その伝統を背負った南部人として、肯定的な感情を持つ一方で、知識人、作家として、時代の流れによる変化の必要性を感じていただろう。

クエンティン・コンプソンとゲイル・ハイタワーは、南部の過去に執着し、それを保存したいという欲望を持っているキャラクターである。しかし、こういった過去の問題に、南部社会において連綿と受け継がれてきた歪んだ人種意識が絡む時、いよいよその悲劇性は計り知れないものへとになっていく。

第二節 ジョー・クリスマスの死と過去

リー・クリントン・ジェンキンスが、「クリスマスは彼の過去によって決まるのではなく、彼の過去そのものであり、逃げることは不可能である」(138)と論じるように、彼もまた「現在」にいながらにして「過去」に支配されている人物である。では、この「過去」とは一体何だろうか。

『八月の光』において、クリスマスの過去はまず、五歳の頃に孤児院で経験したことについて語られる。彼は、二十七歳の栄養士の女性の情事を目撃してしまった後、早く彼女に鞭で打って貰って清算を済ませ、いっさいを帳消しにしたいと思っていたが、懲罰を受けるだろうという予想に反して、彼は彼女から一ドル銀貨を渡される。クリスマスには、彼女のこの行動が理解できず、相手が自分に何を望んでいるのか分からなかった(181)。ドナルド・M・カーティグナーが指摘するように、クリスマスはこれらの出来事を通して、栄養士から女性、セックス、予測不可能性、秘密が入り混じった関係について学んだ(95)。そして、孤児院から里親マッケカーンの下で暮らすようになった後は、彼から、厳密な定義の例を学ぶ。ジョーはマッケカーン宅で、予測不可能性とカルヴィン主義に代表される予測可能性を、それぞれ養母と養父から経験することになる。そして彼は、ミセスマッケカーンの親切という彼にとって予測不可能なものを憎み、マッケカーンの予測可能な厳格さを受け入れる。

It was not the hard work which he hated, nor the punishment and injustice. He was used to that before he ever saw either of them. He expected no less, and so he was neither outraged nor surprised. It was the women: that soft kindness which he believed himself doomed to be forever victim of and which he hated worse than he did the hard and ruthless justice of men. (523)

彼が憎んでいたのはつらい仕事ではなかったし、懲罰や不公平さでもなかった。そうしたものには、この二人と出会う前から慣れていて、その程度のことは当然だと思っていたのであり、だから憤ることも驚くこともなかった。問題は女の方だった—彼が自分は

永久にその犠牲となる運命なのだと信じ、男たちの過酷で無情な公平さよりもひどく憎んだのは、そのやわらかい親切だった。(245-46)

ジョーは産まれた時から「母親」を持たず、これまで、孤児院でアリスという十二歳の少女に優しくしてもらったということ以外、ミセスマッケカーンが与えてくれるような親切を経験したことがない。そして、諏訪部浩一が、「彼の人生がどうしようもなく厳しく惨めなものであるからこそ、彼はその過酷な人生を統括する「法」を相対化してしまうような「優しさ」を拒絶しなければならないのだ」(237)と指摘しているように、孤児院やマッケカーン宅での過酷さ、厳しさ故に彼は、親切を受け入れることができない。また、この諏訪部の指摘に加えて、彼が彼女の親切を拒絶する理由として、次のようなことが言える。それは、ジョーが養父に命じられ、母屋に教義問答を取りに行き、そこでミセスマッケカーンの、人がなしうる最高に優しい仕草をしようとしていたのを見もしないで通り過ぎた時のことである。この時の彼の顔は、「プライド、絶望、もしくは男の愚かしい虚栄心によってこわばっていた」(217)。もしジョーに、彼女の親切を受け入れたいという思いがあったとしても、ここで挙げられているような、プライドや虚栄心によって、その思いはねじ伏せられるだろう。そして彼は、教義問答を手にとり、養父のいる馬小屋に戻り、カルヴィン主義を叩き込まれる。

ここまで主に、彼の過去について、カルヴィン主義による予測可能性と女性的存在による予想不可能性ということを見てきたが、次に人種について（肌の色の違いへの執着心について）見ていく。

ジョー・クリスマスは、白人と黒人、そのどちらでもあり、またそのどちらでもないという不安定なアイデンティティを有している人物である。彼は周囲から見れば白人であるが、幼少の頃に、孤児院の他の子供から黒人と呼ばれていた。

なぜ彼の肌の色は白いにも関わらず子供たちは彼が黒人であると分かったのだろうか。栄養士が言うように、子供なりの直感なのか(194)、それともクリスマスを見張っていた年寄り（彼の祖父であり、彼の出生について知っている）が彼らに教えたのか。それともジョアナ・バーデンの父が彼女に、「その人種〔黒人〕は永遠に呪われていて、罪深い白人種の宿命であり呪いの一部となる定めを負わされているんだ。覚えておくんだぞ。白人の宿命であり、白人の呪いなんだからな。ずっと永遠にだ。[...] たとえお前がまだ子供だとしてもな。これまでに生まれ、これから生まれてくるあらゆる白人に与えられた呪いなんだ。誰もそれを逃れることは出来ないんだよ」(370)と述べているような黒人嫌悪（差別）という「呪い」を孤児院にいた彼らも背負っていたからなのか。

クリスマスは、彼らに「黒人」と呼ばれる幼少期を過ごし、彼が里親のマッケカーンの下で暮らすようになってからも、自分には黒人の血が入っているということを明確に自覚している。それは次の例から分かる。

“ [...] That he has nursed a nigger beneath his own roof, with his own food at his own table.” (522)

「あいつが自分の屋根の下で育てて自分のテーブルで自分の食べ物を食わせてきたのは

彼はこの時、十四歳か十五歳で、マッケカーンの下に来てから十年近く「白人」として生活を送っていたにも関わらず、彼の黒人としてのアイデンティティはしっかりと残っている。そして十七歳になってからも当然それは残り続け、バーニーとの悲劇的（彼に、黒い血をもつということがどういう意味を持つのかを教えたという意味では決定的）な別れの一因となった。自分には黒人の血が入っているというクリスマスの自覚、これは、ブルックスが『『八月の光』において、問題なのは、ジョーが黒人の遺伝子を持っているかもしれない可能性ではなく、自分には黒人の血が流れているかもしれないという信念である』（174）と指摘しているように、彼の「白人」としての自己を脅かすものである。ジョー自身がこの信念を持っている限り、彼は「白人」になることはできない。また、たとえ、彼以外、つまりは南部共同体が彼の肌の色から、彼を白人と認めたとしても（実際に彼はジョアナを殺す前までは社会的に白人である）、彼はこの子供の頃から抱いてきた信念を決して捨てることはできない。

クリスマスは恋人のバーニーに、自分には黒人の血が流れているということを告げたが、この時彼女はそれを信じなかった。しかし、ダンスパーティーの一件後、クリスマスのプロポーズのようなものを拒絶する際に、彼女は、「ずっと白人並みに相手にしてきてやったのに。白人並みにだよ。」(320) や「こいつは黒ん坊だと自分でいったんだよ。このクソガキが。」(319) などと彼を罵倒する。しかし、これらの言葉はこの時にただの雑音であり、クリスマスにとってはまだ大した意味を持っていなかった(318, 320)。これは、この時の彼には、黒人の血が入っているから白人の女に拒絶されるという認識がなかったためだろう。だからこそ、彼はそのことをためらいもなく彼女に告げることができたのである。

これらの言葉が大きな意味を持つようになったのは、この夜の出来事以降であり、南部で暮らしている間に彼が必然的にそれを理解するようになってからである。その結果彼は、金を持っていようといなくとも、宿の女と寝て、「自分は黒人である」と告げることで、罵られ、殴られるということを繰り返すようになる。そしてクリスマスは、黒い肌の男は白人の女に拒絶されるという認識——これは、後に述べる白人の血による黒人嫌悪でもある——を強く持つようになった。いや、むしろその信念に固執したのである。それは、彼が、北部の女性に拒絶されなかった時、「黒い肌をした男を受け入れる白人の女がいるなどは、彼はそれまで知らなかったのだ」(330) と、南部で築き上げられた認識に反した価値観を受け入れることができないほどに強いものである。たとえ、バーニーがあの時、彼が黒人だからという理由で結婚を拒絶したのではなかった——実際、彼女や仲間たちは警官に追われることに怒っていた——としても、彼女に言われたことの意味を明確に解釈できるようになった後では、彼は、愛する人に拒絶されたのは自分に黒人の血が混じっているからだと信じるだろう。ここでは、彼のあの夜以降に積み上げられた経験によって、過去の出来事に明確な意味が与えられる。そして彼はそのときになって初めてその過去の記憶に苦しむことになると共に、彼自身の白人の血による黒人の血への嫌悪を強めることになる。

クリスマスは、北部での一件後、白人を避け、黒人の間で生活をしようと試みるが、結局のところそれにも失敗する。以下に挙げるのは、彼が黒人の女性と夫婦のような関係であっ

た時のエピソードである。

[...] trying to breath into himself the dark odor, the dark and inscrutable thinking and being of negroes, with each suspiration trying to expel from himself the white blood and the white thinking and being. And all the white his nostrils at the odor which he was trying to make his own would whiten and tauten, his whole being writhe and strain with physical outrage and spiritual denial. (565)

体内にその黒い臭気を、黒人たちの暗く不可解な思考と存在を吸い込もうと努め、そして一息吐くごとに、白い血と白い存在と思考を体内から追い出そうとした。だが、その間ずっと、自らのものにしようとしている臭いを嗅ぐ彼の鼻腔は白く引き締まり、彼の全存在が、肉体的な憤激と精神的な拒絶を引き起こして悶え引きつるのだった。(331)

クリスマスは、自分の中の「白人」を追い出し、「黒人」になろうと、黒人の臭いを吸込み、受け入れようとするも、彼の「白人」としての肉体がどうしようもなくそれを拒絶してしまう。彼がこのように「黒人」をどうしても受け入れることができないのは、彼の個人的な経験（記憶）、つまり、愛する人に黒人であるということ拒絶されてしまったという経験が一因となったのは間違いない。しかしながら、そのトラウマ的な記憶より強く、クリスマスの肉体が黒人の臭いを受け入れることを許さないのは、彼に流れる「白人」の血がそれを許さないからである。そして、彼のこの白人の血は、彼が十七歳まで過ごし、そして三十三歳に再び戻ってくる南部社会の白人に流れている血でもある。

南部白人に流れているこの血は、黒人を自分たちの下にいる者として軽蔑し、嫌悪する（白人種優越感）。この作品において、ジョー・クリスマスの悲惨な死以外にも、例えば、ジョアナ・バーデンの兄と祖父は州選挙における黒人投票権をめぐる問題から元奴隷所有者（サトベン）に殺され（69）、ハイタワー牧師は、黒人の料理人（最初は女で次は男の）を家に置き続けたことでKKKに殺されかけており（105）、南部における白人が黒人に抱く、嫌悪や徹底した差別意識を確認することができる。

そして、こういった歪んだ黒人意識をジョー自身も「白人」として持っていた。このことを諏訪部は次のように分析している。

南部白人の視点から自らを眺めることで、彼〔クリスマス〕は自らを「他者化」する。共同体の人々は彼を「他者化」することで、自己の人種的優越感と、共同体への帰属感を共に確認する。それに対し、ジョーの「自己他者化」は、自分の「黒人」としてのアイデンティティを、南部白人の視点から見つめ、確認し、軽蔑するという点において、自己疎外であり、自己懲罰でさえある。(229)

このように彼は、「白人」として、南部社会に継承されてきた歪んだ人種観——ジョアナの父親に言わせれば「白人の呪い」——を背負い、それによって自らの「黒人」を否定しなければならなくなる。また、こういったジョーの黒人否定観は、先にも述べたように、バーニーとの出来事によって強められることになった。

結局彼は、白人の中にも黒人の中にも居場所を見つけることができず、彼は自分が何者か分からない。そして彼は、三十三歳の時に再び南部へ行き、そこで「白人の呪い」を背負った、ジョアナ・バーデンと出会う。彼女は、田中が指摘するように、贖罪行為として(205)、クリスマスに黒人の学校へ通い「黒人」になることを求めたが、彼は先に挙げた理由からそれを拒否する。しかしながら、ジョアナ殺害後、彼の曖昧なアイデンティティに変化が訪れる。なぜなら、白人のジョアナを殺したことで、ジョーは社会的に黒人となるからである。彼は、彼女を殺害することで、オルガ・W・ヴィッカーが述べるように、数世代に渡ってそれを作り上げてきた社会によって、ほぼ無造作に行われる追跡とリンチの儀式に、否応なく強制的に参加させられることになる(67)。つまり、クリスマスはジョアナを殺したその瞬間から、社会的に完全に「黒人」、それも「白人女性をレイプして殺した黒人」となったのである。社会的に「黒人」になったクリスマスは黒人の臭いのする靴を履いて保安官達から逃げたり(119)、黒人の料理を食べたりする(125)。また、クリスマスがモックタウンについた時にも、「目の前にある泥除けに両足を、黒人の臭いがする黒い靴をのせている—彼の足首がまとっているそのしるしは、黒い潮が足元から、まるで死がうごめいているかのように、両足を這い上がってきていることを消しがたくはっきりと示している」(132)とあるように、黒人の臭いがする靴を履いて、黒人としてつかまりに行く。そして、とうとう最後には「黒人」として殺されることになる。彼は「黒人」になることを求めてきたジョアナを殺したことによって、正確に言えば、白人のブラウンがクリスマスは黒人だと警官たちに告げたことで黒人になった。南部社会において、たとえ肌の色が白くても「黒人」になることは簡単なことなのである(逆は不可能だが)。そしてまた、自分には黒人の血が入っているかもしれないという信念を捨てることができないクリスマスが、南部社会で自己を確立できるとしたら、皮肉にも彼が拒み続けてきた「黒人」に成る道しか残されていなかったのである。

クリスマスの死は、彼および南部共同体の過去によるものである。確かに彼と彼のかつての恋人バーニーとの出来事は極めて個人的なものである。しかしながらまた、彼らが持っている黒人観(嫌悪)は、南部共同体によって長きにわたり保存されてきたものである。そして、このクリスマスという「黒人」の物語もまた南部の物語として共同体の人々である「彼ら」の記憶に残り続ける。

It seemed to rush out of his pale body like the rush of sparks from a rising rocket; upon that black blast the man seemed to rise soaring into their memories forever and ever. (743)

それ[黒い血]は、上昇していく狼煙からでる花火のように、その青白い体から噴出するように見え、その黒い噴流に乗って、男は彼らの記憶の中へと永遠に上昇し続けるように思えた。彼らは決してこの光景を忘れることはできないだろう。(321)

ここで述べられているように、確かにクリスマスは、南部共同体の記憶に残る。しかし、共同体の記憶に保存されるクリスマスは、歪んだ人種意識を持つ南部社会において悲劇的な死を遂げた人物としてではなく、「白人女性をレイプして殺した黒人」としてなのである。

第三章 過去（記憶）と匂い

第二章まで、フォークナーの南部的過去について論じてきたが、この「過去」と「匂い」には密接な関係性がある。本章では、第一章で取り上げた『響きと怒り』でクエンティンを苦しめたスイカズラの匂いについて考察する。

彼がキャディの性を象徴するスイカズラの匂いを否定しなければならない理由は先に述べた通りだが、キャディの「前はあの花が好きだったじゃないの」(296) というセリフにあるように、彼は以前、つまりはキャディの処女喪失前はこの匂いが好きだった。しかし、今となってはそれは最も悲しい匂いとなってしまった。

honeysuckle was the sadest odor of all, I think. I remwmbber lots of them. Wisteria was one. (112)

スイカズラはあらゆる匂いの中で一番悲しい匂いだと僕は思う。僕はいろんなものの匂いを覚えている。フジはそのひとつだ。(326)

スイカズラが最も悲しい匂いであるのは、それがキャディの性と、南部の頹廢と結びついているからであるが、さらにこれに加えて、スイカズラは彼にとって懐かしい子供時代を象徴していたのに、キャディの処女性が失われた時にその意味が変化してしまったから、と云えるのではないか。クエンティンが言うように、彼は色々な物の匂いを覚えていて、藤の花は彼が小さい頃に藤棚の下で遊んでいた懐かしい思い出と結びついている。先に挙げたキャディのセリフと、藤の花が少年時代の思い出を象徴しているという点から考えて、スイカズラも同じように懐かしい思い出と結びついていた花であったと考えられる。しかし、キャディの処女喪失後にその性質が変化してしまったのである。例えば、それは、杉の木立が香水の匂いを持つようになったのと同じような変化である。

lying there trying not to think of the swing until all cedars come to have that vivid dead smells of perfume that Benji hated so. (117)

横になってブランコのことを考えないようにしているうちに あそこにある杉の木のすべてが ベンジーがあればどいやがったあの香水のなまなましくすえた匂いを持つようになることもなかった。(339)

クエンティンがかつて好きだったスイカズラの匂いは、何でもなかったはずの杉の木立——キャディやミスクエンティンの逢引きの場所として、ブランコと同じく性と深く結び付いている——が香水の匂いを帯びるようになったのと同じように、キャディの性を象徴するもの、つまり彼にとっては恨めしく、否定しなければならないものへと変化したのである。変化を望まない彼は、少年時代の懐かしさという性質を持っていたスイカズラが、キャディの性（頹廢）を象徴するものへと変化してしまったという所に、悲しみをみたのではないか。

これについて例えば、ヴィッカーリーは、ベンジーとクエンティンは特定の匂いを脅威として認識している点では共通するが、ベンジーの場合、キャディと結びついていた木の香りが

わけも分からず消えてしまったこと（香水によって）、また、ある香りが別の香りに変化するということ（つまり、ベンジーが好むパターン以外のものが現れること）に対して憤慨の声を上げるのに対して、クエンティンの場合には、彼がかつて好きだったスイカズラの匂いが抑圧的で憎むべきものへと変化したという、その変化自体に憤っている、と指摘する(41)。このように、クエンティンはスイカズラの匂いの変化にたいして、悲しむと共に憤っているのだ。そしてまた、この匂いは「たそがれ」(“twilight”)のイメージと深く結びついている。

クエンティンが郊外を歩き回る「現在」において、夕暮れ時になるのは彼が死ぬ間際の一場面のみであるが、彼の過去において、特にそれはキャディと結びついたものとしてその描写を確認する事ができる。例えば、さきに挙げた川辺のやりとり、同伴の逢引きや次に挙げるキャディの帰宅の場面である。

getting the odor of honeysuckle all mixed she would have told me not to let me sit there on the steps hearing her door twilight slamming hearing Benjiy still crying Supper she would have to come down then getting honeysuckle all mixed up in (85)
スイカズラの香りをすっかり混じり込ませ 彼女は僕に話してくれるつもりだっただろうけど 僕は待ちぼうけで 台所の昇り段にすわり 彼女の部屋のドアが たそがれにバタンと閉まるのを聞き ベンジーがまだ泣いているのを聞いていた 晩ごはんは 彼女は降りて来なきゃならないだろう スイカズラの香りをたそがれの中にすっかり混じりこませて (251)

また、ここで挙げたような「たそがれ」のイメージは、彼女の結婚式前日の場面(63)においても使われている。このように、たそがれのイメージは、クエンティンにとって悲劇的な場面においてキャディ及びスイカズラと深いつながりを持っているが、彼は、この「たそがれ」(“twilight”)について、次のように述べている。

When it bloomed in the spring and it rained the smell was everywhere you didn't notice it so much at other times but when it rained the smell began to come into the house at twilight either it would rain more twilight or there was something in the light itself but it always smelled strongest then until I would lie in bed thinking when will it stop when will it stop. (112)

春になって花が咲いて雨が降ると、匂いがあたりに立ち込めた ふだんはそれほど気にならないのだけど 雨が降ると匂いはたそがれ時に家の中まではいつか来た たそがれ時に雨がたくさん降ったせいなのか それともあの光それ自体の中になにかがあったからなのかそれはわからなかったけど匂いはいつもたそがれ時に一番強く しまいに僕はベッドで横になって匂いがいつやむんだ いつやむんだ と考えたものだった。(327)

ここで彼は、スイカズラの匂いに苦しめられると共に、たそがれ時にその匂いが強くなることについて二つの考察をしている。その一つが雨との関係性である。これは単に、雨が花の

匂いを強める自然現象として解釈することも可能だが、匂いと同じく様々な象徴性を有する「水」との結びつきの中にその深層の意味を探るべきだろう。この水について、ブレイカスタンは、以下のように説明している。

水は浄化するものとしての機能がある一方で、キャディと水は密接な関係にあり、キャディの性と深く結びついたものであり、官能的なものでもある。(60-61)

キャディの性と水の結びつきで言えば、例えば、彼らが子供時代にキャディが川で服を濡らす場面やズロースを泥で汚す場面が最初のそれであり、また、キャディの処女喪失後の彼女とクエンティンの一連のやり取りの時にも雨が降っていた。一方で、「浄化」するものとしての水は、キャディが、彼女の性を象徴する香水をシャワーで落としたり、チャーリーというボーイフレンドとキスをした後に、口を洗ったりする場面において、彼女の性を消す役割を持っている。このように水は、性を象徴するものとして、また逆に、その性を消すものとして、全く正反対の機能を有する。

たそがれ時に降る雨（彼の死の直前を除いて）を「浄化」するものとしてではなく、キャディの性と深く結びついたものとして捉えるならば、クエンティンが苦しむわけが分かる。先に挙げたクエンティンがスイカズラの匂いに苦しむ場面では、もちろん自然現象として実際に匂いが強くなったということに加えて、キャディの性と水の結びつきによって、雨が降っていない時よりもより一層それを思い起こされることにより、スイカズラの匂いが強く感じられるのである。

次に、クエンティンが述べる、「あの光それ自体の中になにかがあったからなのか」という問いについて考えてみたい。

彼はたそがれについて、「時間が本当に止まってしまったかのようなあの独特な光」(326)と述べている。また、彼が語り手として登場する短編「正義」(“A Justice”)でも、たそがれについての言及が見られる。彼はたそがれについて、“in that strange, faintly sinister suspension of twilight” (360)¹²と述べているが、この二つに共通している「時間停止」のイメージはどう捉えたらよいだろうか。

たそがれは昼と夜の間であると共に、大橋健三郎(238-39)や長谷川(82-85)が指摘するように、「生」と「死」の二面性(生と死の両面価値)を象徴している。そして、クエンティンは、現在と過去の間を彷徨っているが、彼はまた、大橋(224-25)が指摘するように、生と死の境目をさまよいながら「現在」を生きている。

クエンティンが郊外を歩き回る「現在」においてたそがれ時が訪れるのは、いよいよ彼が死ぬ時間が近づいてきた時である。この場面で、彼はたそがれの中に居ながらも、「スイカズラの匂いはなかった」(326)と、あの忌々しい匂いの不在について言及するが、なぜ彼はここでその匂いを嗅がないのだろうか。それは、彼が「最高に平和な言葉」(335)と感じる、いなくなる(死ぬ)時間がいよいよ近づいてきたことにより、ある種の平穏の中にいるからではないだろうか。

クエンティンはスイカズラの匂いの代わりに、たそがれの向こうに「水」の匂いを感じる。この水を、先に少し触れたような「浄化」するものとして、また、ヴィッカーリーが述べ

るように、それを「忘却のシンボル」として捉えるならば (42)、スイカズラの匂いではなく、水の匂いを嗅ぐことによって、彼は平穏を感じているのではないだろうか。クエンティンの平穏は、いなくなる (死ぬ) ことであり、ここで彼は、たそがれが象徴する生と死の間 (クエンティンの置かれた状況) という不安定な状態からほとんど抜け出して、その向こうに見える暗闇の中をうねっていく川の中、つまりは死へ、またそれに伴う時間の停止へと向かっているとと言える。

とはいえ、このたそがれの場面において、「スイカズラの匂いはしなかった」という現在から、彼がそれに悩まされていた時の過去に意識が移る訳だが、これを、例えばブレイカスタンが述べるように、「最後に再び苦しみの主要な象徴になったスイカズラの匂いについて思い悩む」(137) からと、つまりクエンティンがまだそれについて悩み苦しんでいると捉えることも確かに可能である。しかし、長谷川が指摘するように、「スイカズラの匂いの中でアイデンティティを喪失してしまっていた過去の自己の姿ある距離を置いて回想しているのである」(84) と捉える方が、彼の今の内的状況——死が近づいてきた事により「スイカズラの匂い」をかかないで済むという平穏な状況——に合っている。

ここまで、主に「現在」におけるたそがれとスイカズラの匂いの関係性を見てきた。それが頻出するのはやはり「過去」においてである。1960年6月2日の夕暮れ時——自分の死の不可避性を確認し、自殺場所を定め終わった後——において彼は平穏の中にいたというのは先に述べた通りであるが、それまでの彼は、たそがれが象徴する生と死の「中間」(その迷いの中)、もしくは宙吊り状態にあったのである。

先にも触れたように、たそがれはキャディの処女喪失や結婚式など、クエンティンにとって悲劇的であり、また否定したい「変化」と結びついている。たそがれを、クエンティンが述べているように、「時間停止」のイメージで捉えると、次のようなことが言えるのではないか。つまり、これらの場面において、たそがれはクエンティンの願望を反映しているのではないかということである。繰り返しになるが、彼は変化を望まない。彼は、ペリン・ローリが、「クエンティンが本当に望んでいるのは、時間の外に出て、永遠、つまりは、変化や運動を超越した状態 (無限に続く見せかけの現在)」(56) と指摘するように、彼らがまだ子供であった頃を永遠にとどめておきたい (おきたかった) という願望を持っている。そんな彼の願望が、夜でも昼でもない「時間が本当に止まってしまったかのような独特な光」(327) を放つ一瞬の停止している瞬間に反映されているのではないだろうか。

しかし、たそがれにおける時間の停止は当然、永遠には続かない。それはクエンティンの願望に反して、時間が前に進んでいくということを表しているように思われる。たそがれの訪れとその終わりによって、クエンティンは「一瞬」をとどめておけないことを思い知らされるのだ。

一方で、「現在」におけるたそがれでは、彼のこの願望は、一日歩き回り、時間の外に出ること (それを征服する) は出来ないということを再確認したことでなくなり (不可能であることを受け入れ)、ここではそれは、彼が救われるもう一つの方法である「死」による停止へのイメージへと移ろう。今までのたそがれにおいては、クエンティンの「停止」への願望は叶わないが、この「現在」では、いよいよ別の方法ではあるが、「停止」する事ができるのである。「停止」つまり彼に平和を与えてくれる死を目の前に見据えたからこそクエン

ティンはここで「スイカズラの匂いはなかった」と安堵することができるのである。

第四章 その他の作品における過去と匂いについて

第三章まで主に、『響きと怒り』のクエンティン・コンプソンを『アブサロム・アブサロム』と関連付け、また『八月の光』のゲイル・ハイタワー牧師とジョー・クリスマスという三人に注目して論じてきた。しかし、フォークナーの作品には彼ら以外にも、例えば、過去を神格化したり、また過去によって殺されたりする人物は存在する。第四章では、サートリス家について、『土にまみれた旗』(*Flags in the Dust*)と「バーベナの匂い」(“An Odor of Verbena”)という二つの作品に注目し、そこで過去と匂いがどのように扱われているか見ていく。

『八月の光』においてハイタワーがトランクを開けそこに過去を発見したように、『土にまみれた旗』においてもその行為は似たような意味を持っている。南北戦争を経験しているオールドベイヤードは、大箱を儀式的な行為として時折開いては、そこに「過去」の匂いを嗅ぐ。そして彼はいわば古き良き過去に思いを巡らせてノスタルジックな気分になる。

The ghosts fell away and from the chest there rose a thin exhilarating odor of cedar, and something else: a scent drily and muskily nostalgic, as of old ashes, [...] (80)¹³

大箱の中から、杉のさわやかな匂いがほのかに立ち上った。他の匂いもした—古い灰が持つような、乾いていて、麝香のようにノスタルジックな香りだった。(122)¹⁴

このようにオールドベイヤードは過去を懐かしむが、一方で、ヤングベイヤードの大箱を開けるといふ行為からは、全く別のことが読み取れる。彼はオールドベイヤードのように肯定的に過去を捉えることは出来ない。彼は、大箱の中にあつた、弟ジョニーの生命と暖かさを感じさせる匂いがするコートを、ジョニーの本と記念品、つまり彼を思い出させるものと一緒に燃やしてしまう。ここで彼は、その匂いを、その過去を消し去ろうとしているのだ。

ヤングベイヤードの弟ジョニーは第一次世界大戦で戦死した。それもドイツ軍の飛行機が大勢いる中に単独で飛行していくという無謀な行為によって死亡した。この弟をヤングベイヤードは馬鹿者扱いをするが、それと同時に田中が、「彼が帰郷した時に示す弟の死に対する罪悪感、無力感と同時に、彼の心の奥底では、弟のように名誉と蛮勇を尊ぶサートリスの血に殉ずることもなく、無傷で生きて帰郷したことから生じる負い目、後ろめたさ、および、家の名折れとなったことへの口惜しさや劣等感も、激しく渦巻いていたと思われる」(102)と指摘するように、弟に対する憧れもあった。この弟に対する憧れ、つまりは死への願望は、例えば、彼が弟について語る時にあらわれる。

And beneath it all, the bitter struggling of his stubborn heart; (238)

そしてそうした話全体(弟について話)の底には、誤った頑固なプライドの苦々しい戦いがあった(342)

また、次に掲げる箇所からは、ヤングベイヤードの、弟と同じく戦争で死にたかったという願望が読み取れる。

[...] relived it again as you might run over a printed tale, trying to remember, feel, a bullet going into his body or head that might have slain him at the same instant. That would account for it, would explain so much: (315)

彼はこうしたことを、印刷され、何度も読まれている物語を読み返すようにして、あらためて再体験しながら、まさにその瞬間に彼の命を奪ったかもしれない弾丸が彼の肉体か頭を貫くのを思い出そうと、感じようとした。そうであればつじつまが合い、いろいろと合点がいくことだろう。(456)

このようにヤングベイヤードは明らかに死への願望を持っているが、このことは彼が帰還してから、自動車を荒々しく乗り回すという行為にもよく表れている。弟のように戦争で死ぬことが出来なかった彼は帰還してから、その暴力性（凶暴性）およびフラストレーションを自動車を荒々しく乗り回すことにより発散させようとする。彼は、誰かを隣りに乗せて運転する時には必ずといいいいほどその相手を怯えさせるほどの荒々しい運転をする。例えば、サイモンを乗せた時には、彼が怯えて車から降りるということに加えて、「唇が見えなくなるほどに歯をむき出しにして嘲っている、ベイヤードの凶暴な顔が見えたくらいだった」(160)と、その表情からも彼の凶暴性（暴力性）が伺える。ベイヤードは、そんな荒々しい自動車の運転によって事故を起こしたり、祖父を殺してしまったりするが、結局彼自身は怪我をただけで、死ぬことができなかった。

そしてとうとう弟と同じように飛行機を使って自殺することになったが、彼を自殺にまで追い詰めたもの、もしくは死への願望といったものは、何に起因するのだろうか。彼にそれを抱かせたのは、彼に流れるサートリスの血であった。サートリスの血は、いわば暴力性の血であり、ミスジェニーに言わせれば、サートリスは一人残らず野蛮人である(409)。例えば、ヤングベイヤードや弟ジョニーの暴力性（凶暴性）は、彼らの過去にもよく表れていて、我々はそれをミスジェニーやアークサリーがナーシサに語る昔の彼らの様子や、ナーシサ自らが彼らを見た記憶を回想する場面などからも知ることができる。

ヤングベイヤードはこの血、つまり名誉と蛮勇を尊ぶサートリスの血から、「逃れられない破滅」から(397)、結局は逃れることができなかった。ここから逃れるために、ヤングベイヤードは、過去を、またそれを感じさせる匂いを消し去ろうとする必要があり、弟のコートや記念品を燃やした。しかし、それ（過去を消すこと）に失敗し、自動車でも馬でもなく、弟と同じように飛行機で自殺をした。彼はまさにサートリス家の血——サートリス家が築いてきた暴力性の歴史——によって殺されたと言えるだろうし、彼の死は、弟が死んだ時にすでに決まっていたのである。

ヤングベイヤードを死に追いやったこのサートリスの暴力性の歴史は、オールドベイヤードが若かりし頃の話である「バーベナの匂い」にも描かれている。

この作品は、『土にまみれた旗』のオールドベイヤードが学生の頃に、父親（サートリス大佐）がレッドモンドという男との決闘で死んだという知らせを受けて故郷に戻るところか

ら始まり、彼と彼を迎えに来たリンゴと馬を走らせる。そこで、ベイヤードと彼の父親の再婚相手であるドルーシラの関係について回想される。ベイヤードにとって彼女はまさに「過去」を体現する女性である。例えば、彼女は、戦争が済んで四年もたった今でもまだ、「あの戦争最後の年の空気を呼吸し、その中に生きている様子」(232)をしている。そんな彼女はある日、ベイヤードに接吻を求める。

I just knew that she was looking at me as she never had before and that the scent of verbena in her hair seemed to have increased a hundred times, to have got a hundred times stronger, to be everywhere in the dusk in which something was about to happen which I had never dreamed of. (261-262)¹⁵

私はただ、彼女が私に対して異常な視線を投げかけ、彼女の髪にさしたバーベナの匂いが百倍もまし、百倍も強くなって、あたりの薄暗がりの中に瀰漫し、なにか、今まで夢見たこともないようなことが起こりかけているのに気がついただけだった。(244)

ドルーシラはここでベイヤードに対して、ある誓いを立てさせようとしている。ドルーシラは彼に接吻を求める前に、彼女が理想とする男性像のようなものを語る。それは、「男の人にとってこの世で一番いいことは、その人が何かを、そうね、女の人がいいわね、しっかりと強く、根かぎり愛して若い内に死ぬことじゃないかしらってね。」(244)ということであり、ドルーシラはここでの接吻においては、自分を愛するようにとベイヤードに要求している。そしてこの接吻と誓いは、今夜、ベイヤードが家に帰るともう一度繰り返される。

ベイヤードが帰宅すると、ドルーシラは彼に決闘用のピストルを渡し、右手に接吻する。しかし、彼の表情に、父親の仇であるレッドモンドを殺す意志がないことを見て取ると、「この人ったら、ちがうんですって—それなのに、あたし、この人の手に接吻したんだわ」(264)とヒステリーを起こす。ドルーシラがここでベイヤードにする接吻では、以前彼女が誓いとして彼に求めたものの続きを、つまりは、愛する人のために決闘で死亡することを求めている。しかし、ベイヤードに自分が求めていたようなことを実行する気がないと知ったドルーシラは、彼の元を去る。

ベイヤードは、今までの伝統的なやり方とは違うやり方でレッドモンドに対峙した。そして、ドルーシラが去った後の部屋に帰ってくると、そこにはバーベナの匂いが充満していた。ベイヤードは彼女が求めたようなものとは異なる、血を流さないという一見暴力性は感じさせない決闘を行い、ドルーシラが身につけていたバーベナの匂いに象徴される過去の古い伝統からは抜け出したように思える。しかしながら、彼女がいなくなった部屋には、バーベナの匂いが満ちており、また、決闘を終えて帰ってきたベイヤードに対して、ミスジェニーは「ああ、あんたがたサートリス家の人たちは呪われている！ほんとうに呪われているんだわ」(289)と涙ながらに訴える。ドルーシラが求めた、血には血をというやり方をしなかったにも関わらず、ミスジェニーはベイヤードもこれまでのサートリス同様に呪われていると言うわけだが、このことを例えば、桐山大介は次のように説明する。

南部の掟に反旗を翻しながらも別の形で（しかもやはり命をかけて）勇気と誇りを証明

せざるを得ないベイヤードは、実はいまだにサートリス家の伝統から、そして南部の定めた悲劇の運命から逃れきれていないのかもしれない。だからこそ、南部の物語の最後はバーベナの芳香に満たされる。(786)

バーベナは、ドルーシラがいつも身につけている花である。その匂いは、ベイヤードにとってドルーシラを、また彼女に体现される過去を象徴するものであり、彼女が彼に誓いを、伝統的なやり方で男として振る舞うことを求める時には、その匂いは百倍も増し、百倍も強くなる。もしベイヤードが、レッドモンドを殺さなかったことでサートリスの築き上げてきた暴力性の伝統や過去から逃れられているとしたら、この匂いはなくなっているはずである。にもかかわらず、彼女の去った部屋にその匂いが充満していたというところに、サートリスの伝統から逃れることの困難さというものが読み取れる。また、これはサートリスの伝統でもあると共に、ここで桐山が「南部の定めた悲劇の運命」と述べているように、また、序文で触れた南部性にもあったように、南部社会の伝統（過去）でもある。そして、この過去を、彼の孫であるヤングベイヤードも背負い、それによって彼は自殺にまで追い込まれたというところに、この過去の持つ重みを読み取ることができる。

結論

『響きと怒り』のクエンティン・コンプソンは、妹キャディの処女喪失に象徴される南部の変化を拒み、時間を征服しようと試みるもそれに失敗し自殺をした。彼は明らかに、自分らがまだ子供だった頃の理想的な過去を保存し続けたいという願望を持っていた。クエンティンのこの願望は、彼が没落貴族の長男として、コンプソン家の名誉を重んじていただけではなく、南部人として、南部社会で共有されている記憶（歴史）を背負い、またそれを保存する役割を否応なく背負っていることに起因していた。こういった過去を保存したいという願望を、『八月の光』のゲイル・ハイタワーもまた持っていた。彼は南北戦争という、南部人をより南部人らしくした出来事にこだわり続けた。また、彼の場合、自殺をしたクエンティンとは異なり、機械的な時間からは切り離されるという条件のもと、理想とした過去の中に生きること成功した——言い換えれば、囚われ続けている。一方で、ジョー・クリスマスや『土にまみれた旗』のヤングベイヤードは、この二人のような願望は持っていなかった。彼らは、南部の過去や伝統によって殺された人物である。

また、これらの作品に共通して観察できるのは、「過去」には大きく二種類あるということである。一つは、その人物にとって個人的な出来事であり、クエンティンにとっては、キャディの処女喪失、クリスマスにとっては例えば、恋人バーニーとの破局、ヤングベイヤードにとっては弟の死である。これらの出来事は彼らの現在、および未来にとって大きな影響を与えた。しかし、これらの個人的な過去のさらに深いところには、南部の伝統や歴史という過去、南部社会の人々が背負っている過去がある。フォークナーは、南部人の作家として、この過去に向き合い、時に、過去に執着する人物を、また、過去に殺されたとも言える人物を描くことで、単に過ぎ去っていくものではなく、現在はおろか未来さえ支配してしまう過去の重みを描いた。そして、個人的な過去と歴史という共同体の過去が生々しく融合

するのが、個人の身体的な記憶の中である。身体に記憶された過去の重みからフォークナーの描く人物たちは逃れられない。作品を通して見えた、この、時に人を死に追いやるほどの重みを持った過去、これこそがフォークナーが描いた過去である。

注

- 1 ページ数、日本語訳は、『ポータブル・フォークナー』マルカム・カウリー編，柴田元幸他訳（河出書房新社，2022）に拠る。以下も同様である。
- 2 本稿における *The Sound and the Fury* の出典はすべて William Faulkner, *The Sound and the Fury*, Third Norton Critical Edition (W. W. Norton, 2014) に拠り、括弧内にページ数を記す。
- 3 ページ数、日本語訳は、『響きと怒り（上）』平石貴樹，新納卓也 訳（岩波文庫，2007）に拠る。以下も同様である。
- 4 ページ数は、William Faulkner, *Collected Stories of William Faulkner* (Vintage International, 1995) に拠る。
- 5 ページ数、日本語訳は、『フォークナー短編集』龍口直太郎 訳（新潮文庫，2013）に拠る。
- 6 本稿における *Absalom, Absalom!* の出典はすべて William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (Random House, 1964) に拠り、括弧内にページ数を記す。
- 7 ページ数、日本語訳は、『アブサロム・アブサロム！（上）』藤平育子 訳（岩波文庫，2023）に拠る。以下も同様である。
- 8 ページ数、日本語訳は、『アブサロム・アブサロム！（下）』藤平育子 訳（岩波文庫，2023）に拠る。以下も同様である。
- 9 ページ数、日本語訳は、『八月の光（上）』諏訪部浩一 訳（岩波文庫，2016）に拠る。以下も同様である。
- 10 本稿における *Light in August* の出典はすべて William Faulkner, *Novels 1930-1935* (Literary Classics of the United States, 2006) に拠り、括弧内にページ数を記す。
- 11 ページ数、日本語訳は、『八月の光（下）』諏訪部浩一 訳（岩波文庫，2016）に拠る。以下も同様である。
- 12 ページ数は、William Faulkner, *Collected Stories* (Random House, 1995) に拠る。
- 13 本稿における *Flags in the Dust* の出典はすべて William Faulkner, *Flags in the Dust* (Random House, 1973) に拠り、括弧内にページ数を記す。
- 14 ページ数、日本語訳は、『土にまみれた旗』諏訪部浩一 訳（河出書房新社，2021）に拠る。以下も同様である。
- 15 本稿における “An Odor of Verbena” の出典は、William Faulkner, *The Unvanquished* (Chatto & Windus, 1967) に拠る。括弧内にページ数を記す。

引用・参考文献

- フォークナー，ウィリアム．『ポータブル・フォークナー』マルカム・カウリー編．柴田元幸他訳．河出書房新社，2022．
- . 『アブサロム・アブサロム！（上）』藤平育子 訳．岩波文庫，2023．
- . 『アブサロム・アブサロム！（下）』藤平育子 訳．岩波文庫，2023．

- . 『響きと怒り（上）』平石貴樹，新納卓也 訳．岩波文庫，2007.
- . 『八月の光（上）』諏訪部浩一 訳．岩波文庫，2016.
- . 『八月の光（下）』諏訪部浩一 訳．岩波文庫，2016.
- . 『土にまみれた旗』諏訪部浩一 訳．河出書房新社，2021.
- . 『フォークナー短編集』龍口直太郎 訳．新潮文庫，2013.
- 長谷川芳男 『ウィリアム・フォークナーの文学—自作へのあくなき挑戦』桐原書店，1989.
- ホフマン，フレデリック・J. 『フォークナー論』伊東正男 訳．審美社，1987.
- 井出義光 『南部 もう一つのアメリカ』東京大学出版会，1978.
- 大橋健三郎 『ウィリアム・フォークナー研究』南雲堂，1996.
- 佐藤道夫 『フォークナーの世界—そのルーツ』成美堂，1996.
- 諏訪部浩一 『ウィリアム・フォークナーの詩学』松柏社，2008.
- 田中久男 『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー』南雲堂，1997.
- 仁木 勝治 『フォークナー論孝』文化書房博文，1982.
- Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure*. Indiana UP, 1976.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner First Encounter*. Yale UP, 1983.
- Cowan, Michael H. *Twentieth Century Interpretations of The Sound and the Fury*. Prentice-Hall, 1968.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. Random House, 1964.
- . “An odor of Verbena.” Chatto & Windus, 1967.
- . *Collected Stories*. Random House, 1995.
- . *Collected Stories of William Faulkner*. Vintage International, 1995.
- . *Flags in the Dust*. Random House, 1973.
- . *Novels 1930-1935*. Literary Classics of the United States, 2006.
- . *The Sound and the Fury*. Third Norton Critical Edition. W. W. Norton, 2014.
- Pitavy, Francis L, ed. *William Faulkner's Light in August: A Critical Casebook*. Garland Publishing, 1982.
- Vickely, Olga W. *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation*. Louisiana State UP, 1964.